

「湯の街別府から」11回「アジア初の宇宙港」

わが街、別府から北へ車を1時間ほどで走らせると、空の玄関口大分空港に着く。国際線も乗り入れる空港だが、国内でも認知度は決して高くなく、「ああ大分県にも地方空港があるのか」という程度の存在だ。しかし今、「宇宙港」として脚光を浴びている。2022年中には、この大分空港から人工衛星を載せたロケットが打ち上げられるからだ。



大分空港ターミナル

大分空港は、県北東部に位置する国東半島の沿岸海域を埋め立てて、海上空港として1971年10月に開港した。当初は、中型機が離着陸できる2000メートルの滑走路だったが、その後南北に500メートル延長されて、大型機も利用できる3000メートルの滑走路に拡張。これが宇宙港としての要件を満たすことになり、大分空港から日本で初めて、いやアジア初のロケットが打ち上げられることになった、というのである。

ロケットの発射というと、国内では鹿児島県にある種子島宇宙センターが有名で、発射台にロケットが垂直に立っている姿が定番。しかし大分空港には、その発射台はない。では、どのようにしてロケットを打ち上げるのか。改良されたジャンボジェット機にロケットを搭載し、高度1万メートル付近で発射させるのである。つ

まり、種子島の「垂直型」に対して、「水平型」と呼ばれる発射方式で、そのためにはジャンボ機が離発着できる3000メートルの滑走路が必要なわけで、しかも安全面から海に近い場所が良いとのことである。



宇宙港であることを示す掲示板

すでに水平型発射は、2021年7月に米国ニューメキシコ州の砂漠地帯で「宇宙港」と名付けられたジェット機用の滑走路が整備され、その宇宙港からロケットを搭載したジェット機が離陸し、ロケットが上空で発射されて世界的な話題を呼んでいる。ロケットを開発して打ち上げたのは、米国の宇宙関連企業ヴァージン・ギャラクティック社で、同社によると、2022年に始める予定の宇宙旅行事業の試験飛行だったという。

そして、本飛行の発着場所に選ばれたのが大分空港。なんでも、ヴァージン・ギャラクティック社の関連企業ヴァージン・オービット社が、アジアで宇宙港となる場所を探し、大分空港に白羽の矢が立った。ロケットを搭載する飛行機として、ジャンボ機「ボーイング747」が想定されていることから、長さ3000メートルの滑走路でないと離着陸できないからで、大分空港が宇宙港に選ばれた最大の理由がこれだった。しかも打ち上げの際には国内外から多くの技術者らが滞在し、見学者も訪れるので、こうした人々に対してのおもてなしも必要。幸い、大分県には別府温泉郷

や由布院温泉がその役割を果たすことができ、加えて大分空港周辺には自動車や精密機械の産業が集積し、その技術力がロケットや人工衛星の点検整備に活用できることも決め手となった。



空港内のお土産売り場には、宇宙関連グッズの販売コーナーも設けられている。

大分空港が宇宙港に決まったことで、県ではその経済波及効果を試算している。世界中の打ち上げ記録を基に、5年間に18回（1.2年目は1回ずつ、3年目に3回、4年目に5回、5年目に8回）打ち上げるとの前提条件で、2021年3月に発表した試算によると、経済効果は102億円に上る結果となった。102億円のうち、最も経済効果が高かったのが観光消費で、その額は全体の半分以上の約56億円。この金額の中には、国際観光都市別府市の存在が大きく貢献していることは言うまでもない。

まだ打ち上げの期日は正式に決定していないが、実現すればアジア初の「水平型宇宙港」として、世界に知れ渡るのは間違いないところ。しかも1回の打ち上げではなく、その後も発射されるので、大分県のイメージアップは計り知れない。大分空港から宇宙への夢と希望を乗せて今、カウントダウンが始まった。

文／写真・鈴木源柱



展望デッキから見た滑走路